

西洋政治思想史の役割について

酒井 弘格

4月より、法学部自治行政学科に勤務させていただくことになった。初めての専任教員の仕事である。また、これをきっかけに横浜への転居と結婚を行った。横浜は魅力的な街であり、休日には家内と楽しい発見に出かけている。そして3月には東日本大震災と原発事故があった。幸い私や知り合いに直接の被害はほとんどなかったものの、私の小さな人生観や世界観は大きく揺さぶられた。今年は私にとって変化の年となった。

神奈川大学での勤務は、周囲の方々の親切に助けられたおかげで、一応軌道に乗ってきたように思う。とはいえ、私に与えられた西洋政治思想史という科目にどのような内容を盛り込み、カリキュラムの中でどのような役割を果たすべきかについては、周囲に頼るわけにいかず、自分で考えなければならない。

FYSやゼミで本学法学部の学生に接してみると印象的だったのは、法律を学んで社会に役立てたい、公務員になって故郷の役に立ちたい、など現実的な目的を持った学生が多いことである（本気度は様々なようだが）。法学部のカリキュラムもそういった学生の要望に応える実務的な内容の比重が大きいうようにうかがえる。就職難の折、現実的な目標を早く見つけて地に足のついた行動に移すのは大事であり、効率よく運営されていると感じた。

ところで政治学は、人文科学と同様に「社会の役に立たない」学問とみなされがちである。一般に政治学の学生というと、悪い言い方をすれば、自分の身の回りのことは見えなくても、国家や文明やたまたま政界について熱く語るの好きな、空想的な学生というイメージがある。政治学にも各種あることは先刻承知だが、少なくとも西洋政治思想史はそういったイメージを持たれ、敬遠されがちである。

意味のないように見える学問を擁護する際によく言われるのは、人間形成や思考力の育成に役立ち、人生を豊かにしてくれるというものである。これは

正しいが、教養科目向きのフレーズであり、3・4年生に担当された専門科目にはあまり相応しくない。

もちろん私は単なる趣味でこの学問を研究し、教育しているわけではない。行政や政治の様々な実務の問題の背後にあるのは、そ

もそも政治とは何か、民主主義や自由、市場、民族とは何かという基本的問題であり、その洞察がなければ、いかなる方針も定まらない。それを得るためには、異なる時代や地域において政治の問題に真剣に取り組んだ偉大な思想家の教えを学ぶことが必要なのは明らかである。

さらに最近の私は、もっと大きな迂回路を通る気持ちでもいいと感じている。私が研究対象としているシュンペーターやハイエクの思想には、いま多くの研究者が取り組んでいるが、「市場とは何か」という切実な問題について教えを乞いたいという態度がしばしば前に出すぎているように感じる。しかしもっと、「この人の内面を理解したい」という素朴な動機で臨むほうが、かえって早く彼らの市場観に到達できるのではないかと思うのである。

このように考えてみると、本学法学部のいくらか実学志向の学生に西洋政治思想史という迂回路の妙味をどう知ってもらおうか、なかなか楽しい仕事になりそうだ。

自分の専攻科目の存在意義が今更ながら気になったのは、初年度を受講生が少なかったからでもある。とりあえず来年度は、もっと他の授業と重ならない時間に授業を移してみよう。それで学生が増えたら、杞憂だったということになる。はたしてどうなるだろうか。

(法学部助教)

